メッセージ　6

雅歌の第六段階――携え上げられることを望む

聖書：雅 8:1-7，13-14

Ⅰ．命における成長と造り変えを通して、キリストを愛する者は命において円熟し、肉を持っていることを除いて、あらゆる面でキリストと同じになったという程度に至ります。彼女は肉のためのうめきから救われることを望んでいます。これは、彼女が体の贖いを通して携え上げられるのを望んでいることを示します――雅 8:1-4．ローマ 8:23．Ⅱコリント 5:1-8．エペソ 4:30 後半．ピリピ 3:21。

Ⅱ．「自分の愛する方に寄りかかって、荒野から上って来る者はだれか？」――雅 8:5 前半：

A．キリストを愛する者は、かつて一人で霊的荒野（この世の環境）から上って来ましたが（3:6）、今は彼女の愛する方に寄りかかって肉の荒野（地的な領域）から上って来ます。彼女は寄る辺なき者のようにキリストに信頼します：

1．「自分の愛する方に寄りかかって」が暗示していることは、主から離れては自分が無力であり、歩くことができないと、彼女が感じているということです。彼女は自分自身を、愛する方に背負っていただく荷とします――Ⅱコリント 12:9-10．13:3-4。

2．「自分の愛する方に寄りかかって」が暗示していることは、ヤコブと同じように、彼女のももの つがいが触れられて、彼女の天然の力が主によって対処されたということです――創 32:24-25。

3．「自分の愛する方に寄りかかって」が暗示していることは、彼女が自分がひどく圧迫されているのを見いだしているようであり、これが荒野の行程が終わるまで続くようであるということです――Ⅱコリント 1:8-9。

4．主に信頼する生活が不可欠です。わたしたちは、聖霊が「自分の愛する方に寄りかかって……上って来る者はだれか？」と叫ばれるまで、寄る辺なき者のように彼に信頼すべきです：

a．「民よ、どんな時にも彼に信頼せよ．あなたがたの心を彼の御前に注ぎ出せ．神はわたしたちの避け所である」――詩 62:8。

b．「朝にあなたの慈愛を聞かせてください．わたしはあなたに信頼するからです。歩むべき道をわたしに知らせてください．わたしはあなたに向かってわたしの魂を上げるからです」――143:8。

c．「エホバに信頼する者たちは、シオンの山のようである．それは動かされることがなく、永遠に存続する」――125:1。シオンの山に関しては、詩 48:2 のフットノート 1 を参照。

B．彼女は主の来られるのを待っているとき、主と共に出て行って、彼を迎えます（参照、マタイ 25:1）。わたしたちの愛する方に寄りかかることによって、わたしたちは絶えず彼をわたしたちの「出て行く」力として享受し、この世を後にします（創 5:22-24．ヘブル 11:5-6）。

Ⅲ．「わたしをあなたの心に印のようにし、あなたの腕に印のようにしてください．愛は死のように強く、ねたみはシェオール［陰府］のように残酷だからです．そのきらめきは

火のきらめき、エホバの炎です」――雅 8:6：

A．彼女は、愛する方に、彼の愛（心）と彼の力（腕）によって自分を守ってくださるようにと求めます。なぜなら、彼の愛は揺り動かされ得ない死のように強く、彼のねたみは征服され得ないシェオール［陰府］のように残酷であるからです。シェオール［陰府］はねたむエホバのようであり、彼は焼き尽くす火であって（申 4:24）、すべての消極的な事物を焼き尽くします。

B．「彼女が自分の元の状態を思い起こす時、へりくだりの感覚で満たされざるを得ません。彼女は自分が空っぽであることを、自分の経験のむなしさを、自分の思いの頼りなさを、自分の追求の無益さを、考えないわけにはいきません。主だけが彼女の唯一の望みです。彼女は、自分が最後まで忍耐することができるかどうかは、自分の忍耐にかかっているのではなく、主の保護にかかっているのだということを認識します。霊的な完全さは、主の再来まで人を支え続けることはできません。あらゆるものは、神と、神の保護する力にかかっています。彼女はそのことを認識する時、『わたしをあなたの心に印のようにし、あなたの腕に印のようにしてください』と叫ばずにはいられなくなります。心は愛の場所であり、腕は力の場所です。『わたしを永遠にあなたの心に印のようにし、あなたの腕に印のようにして消えないようにしてください。祭司がイスラエル人をその胸と肩に担ったように、あなたの心において絶えずわたしを思い起こし、あなたの腕でわたしを支えてください。わたしは、自分が弱く、空っぽであることを知っています。またわたしは、自分の無力さに気づいています。主よ、わたしは望みのない人です。あなたが来られるまで、わたしが自分を守ろうとしても、それはただあなたの御名を辱め、自分自身に損失をもたらすことにしかなりません。あなたの愛とあなたの力だけが、わたしのすべての望みなのです。かつてわたしはあなたを愛していました。しかし、わたしは、その愛が頼りにならないことを知っています。今わたしは、あなたがわたしに対して持っておられる愛だけに頼ります。わたしはかつて、あなたを握っていました。それは力強く握りしめているかのようでした。しかし、今やわたしは、わたしが最も強く握りしめることでさえも、それは弱さにすぎないことを認識します。わたしの信頼は、自分の握りしめる力にあるのではなく、あなたの握りしめる力にあります。わたしはもはや、あなたに対するわたしの愛をあえて語りません。わたしはもはや、あなたを握りしめることをあえて語りません。今から後、すべてはあなたの力とあなたの愛にかかっています』」――ウオッチマン・ニー。（ウオッチマン・ニー全集、第 23 巻、「歌の中の歌」、第 6 区分）

C．彼の愛は試練によって消すこともできず、迫害によっておぼれさせることもできず、財産によって換えられることもできません――雅 8:7．ローマ 8:35-39．Ⅰコリント 13:1-3。

Ⅳ．雅歌の最後の二つの節は、わたしたちが用意されてキリストの花嫁となり、彼の来臨を早め、彼を連れ戻すために極めて重要です――「園の中に住む者よ．わたしの仲間たちは、あなたの声に耳を傾けています．わたしにそれを聞かせてください。わが愛する方よ、急いでください．香料の山々の上のかもしかや、若い雄鹿のようになってください」――雅 8:13-14：

A．彼女は、園、すなわち造り変えられた信者たちの中に住む方としての、彼に呼びかけます。彼女は、自分の仲間たちが彼の声に耳を傾けていると言います。それから、彼

女は主に、「わたしにそれを聞かせてください」と切に求めます。

B．わたしたちの日ごとの祈りは、「主よ、今日、あなたの声、わたしの愛する方の声を聞かせてください」でなければなりません。主は追い求める者に、「あなたの声を聞かせなさい」と言われます（参照、2:14）。わたしたちは主の御声を聞くことを願い、彼はわたしたちの声を聞くことを願われます。それは、相互に親密な交わりを共に持つためです。

C．わたしたちの命は、主の言葉にかかっており、わたしたちの働きは、彼の命令にかかっています。キリストを愛する者としてのわたしたちが、わたしたちの愛する方としての彼のために働くとき、彼との交わりを維持し、常に彼に聞く必要があります。

D．わたしたちの祈りの中心点は、わたしたちが主の語りかけを切望することであるべきです――啓 2:7．イザヤ 50:4-5．出 21:6。

E．主の言葉がなければ、わたしたちには何の啓示も、何の光も、何の知識もありません。信者の生涯は、完全に主の語りかけにかかっています。

F．こういうわけで、「お話しください．あなたのしもべは聞いております」（サムエル上 3:10）と言ったサムエルのように、また「主の足もとに座って、主の言に聞き入っていた」（ルカ 10:39）マリアのように、わたしたちが聞く者としての態度を持つことは極めて重要です。これらの終わりの日々における主の召しは、「耳のある者は、その霊が諸召会に言われることを聞くがよい」（啓 2:7 前半）です。

G．主が戻って来られるために、わたしたちが彼の御声を聞き、耳を傾けることに関する雅歌第 8 章 13 節から 14 節は、エペソ第 5 章 25 節から 27 節と内在的に関係があります。エペソ人への手紙のこれらの節は、神のエコノミー全体を要約しています：

1．25 節は、キリストが召会を愛して、召会のためにご自身を捨てたと言っています。彼が死んでわたしたちを贖い、わたしたちを買い取られたのは、わたしたちが彼の花嫁となることを彼が願っているからです。この節は、キリストが彼の法理的な贖いを伴うわたしたちの贖い主であることを啓示しています。

2．26 節は続けて、彼が召会のためにご自身を捨てたのは、「キリストが召会を聖化し、言葉の中の水の洗いによって召会を清めるため」であると言っています。この節は、キリストが花嫁の用意のための彼の有機的な救いを伴う、命を与える霊であることを啓示しています：

a．現在、キリストは命を与える霊です（Ⅰコリント 15:45 後半）。そして、彼は命を与える霊として、ご自身の言葉の中に具体化されています（ヨハネ 6:63．エペソ 6:17-18．Ⅱテモテ 3:16）。

b．エペソ第 5 章 26 節の「言葉」は、「ロゴス（logos）」ではなく、「レーマ（rhema）」です。レーマは、わたしたちに対する、主の、即時的な、現在の、生きた、個人的な、言葉であって、古いものを新陳代謝的に洗い去り、それを新しいもので置き換え、内側の造り変えを生み出すためです。

c．わたしたちは個人的に、わたしたちの愛する方の御声、すなわち、わたしたちに対する彼の即時的な、現在の語りかけを、毎日聞く必要があります。主の語りかけは、内側で新陳代謝的に、神の流れる命をもってわたしたちを清め、洗って、わたしたちを聖別し、造り変えます。わたしたちが今やそのような洗う過程の中

にいるのは、召会が聖くて傷のないものになるためです。

３．エペソ第 5 章 27 節は言います、「しみやしわや、そのようなものが何もなく、聖くて傷のない栄光の召会を、彼がご自身にささげるためです」。この節は、キリストが花嫁をささげるための花婿であることを啓示しています：

ａ．過去、キリストはわたしたちの贖い主でした。現在、彼は命を与える霊です。そして将来、彼は花婿として、彼の満足のために、召会を彼の配偶者、すなわち真のシュラムの女として、ご自身にささげます――雅 6:13。

ｂ．しわはわたしたちの古さを表徴し、しみはわたしたちの天然の命を表徴し、「そのようなもの」はわたしたちの中の旧創造に属するすべてのものを表徴します。これらのものは、彼の言葉の中の水によって洗い去られ、わたしたちは彼の造り変えられた新創造、彼のシュラムの女となります。

ｃ．わたしたちに対する彼の個人的で、特定の、直接の語りかけは日ごとに、わたしたちの用意を整えて彼の栄光の花嫁とならせます。それは、彼が再び来てわたしたちと結婚することができるためです――「わたしの仲間たちは、あなたの声に耳を傾けています．わたしにそれを聞かせてください」――8:13。

Ⅴ．雅歌という詩的な書の結論の言葉として、キリストを愛する者が祈り求めるのは、彼女の愛する方が復活の力（かもしかと若い雄鹿）の中で急いで戻って来て、全地を満たす彼の甘くて美しい王国（香料の山々）を設立してくださるようにということです――雅 8:14．啓 11:15．ダニエル 2:35：

Ａ．主は、「しかり、わたしはすぐに来る」と言われます。使徒ヨハネの応答は、この言葉を主に祈り読みし返して、「アーメン。主イエスよ、来たりませ！」（啓 22:20）と彼に言うことです。これは聖書における最後の祈りです。全聖書は、祈りとして表現された、主の来臨に対する願いをもって結んでいます。

Ｂ．そのような祈りは、花婿としてのキリストと、花嫁としての愛する者との、新婚の愛の中にある結合と交わりを描写しています。それは、キリストを愛する者であるヨハネの祈り（聖書の結論の言葉として）のようであり、彼の神聖な愛におけるキリストと召会に関する神の永遠のエコノミーを啓示しています。

Ｃ．愛の詩としての雅歌にしたがって、わたしたちが愛の生活を生きることは、わたしたちを神の「ポイエマ（poiema）」、神の詩とし、わたしたちの神に対する究極的な享受としての恵みという結果になります（エペソ 2:10）。主イエスの恵みだけが、わたしたちにすべてを含むキリストを経験させ、享受させ、表現させ、三一の神にあずからせることができます。それは、わたしたちが彼の究極的なシュラムの女、小羊の妻として、彼の永遠の団体的な表現となり、彼の永遠の定められた御旨を成就して、彼とわたしたちが永遠にわたって相互に絶対的な満足と完全な安息を享受するためです（啓 22:21．19:7．21:9）。

Ｄ．「主が来られる時、信仰は事実となり、祈りは置き換えられて賛美となります。愛は影のない完全なものとなり、わたしたちは罪のない領域で主に仕えます。それは何という日でしょう！　主イエスよ、すぐに来てください！」――ウオッチマン・ニー。（ウオッチマン・ニー全集、第 23 巻、「歌の中の歌」、第 6 区分）

©2026 Living Stream Ministry